里見八犬傳

第四輯

巻三

13
3416
18

旧編異聞　三

松野陽吾院

南總里見八犬傳第四輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第二十五回　念玉戯ゐ笛弐借る　妙真良く婦を返す

小文吾ハ粥を再煙くこれを信乃ゐ勧る折。高ゆゑ呼門々。裡面ゐ入るゆあるけまび応もあくど立ちゆゑ障子を磴と引閉て。店前ゐ走出ると見まで是別人ゆゑど。鎌倉の修験者念玉ゑ左ゆゐいと大ゆゑ。梭尾螺を携る。右ゆゐ渋染の扇ゆて。内月のあゆ紙ゆゆゑ。店行燈のほとゐ坐て。小文吾をこゑくゑ。微笑を関取目今還ゆ。扨も昨夕の神輿洗ゐ使ふ倍く賑開ゆゑ。さゑをその果の比彼此の侠客共ゐ角巻ゐ殺風景何國の浦も壮者の心ゐ武速進雄の神慮寔ゐ測ゆ。今朝還ゆと

山清堂蔵

ぶらぶらと濱邊へ夏衣忘れてまでも涼しくもあれど。蚊やぶらぶらと
塩焼小屋。辛苦世渡るもまた一とせ。ぶらぶらとて。けふも彼処ぶらぶら消しうち。暴虐
和殿の力を借りて。爭訟に全く捷ぬ。心かろる雲霽れて。緯の序に
さらの舊跡真間の國府臺のあたりまで。送もかく又ぶらぶらと。長逗留に
なりぬ。明日秋明後日は帰府せべし。今要時の程にて又厄會にあうべ
れと。他夏なくのうまくに。小文吾は。あまぶらぶらとゆけとのひるて。
困じ果て沈吟じ。ぶらぶらや留別にあらゆる。然るに今宵は心ぶらぶらの饗応もべき
筈なれども。いつかせんこの土地の習俗にて。婢児們はきのふより走百病をすれば
一人も在らず。親さへ人に誘引れて。近郷のあれこれ留守は唯某のみ。庖厨の
夏の疎くとも夕膳を進らせん。物ほしうはべれども。と問へ頭をうち掉て否今
途ぶ飯も酒もたう飽くまでる俗なれば。縱百味の飲食でも。豈ぶぐへ腹に席

例の一室に客はあらじ。帳貸夜具のぶくく寢んいざとく貝を突建くやと声
うけて立んとするを小文吾急に推とめ。まづ行燈を置ざまに奥の院へ常圖へ。
灯を挙べ。待夏とのひろ貝をつらくぶくく。そは珍しき大貝え何れで購めん
と問ふく右の食ふ。いつ嚮に濱邊なる人の家にあるべき些の酒
價と換ぶ。水戸盛べ一斗あまり。二斗の一斗のみ入べくぶくん是ぶ人とさしよに
るをもぶまく食べこと。ぶかうぶぶ現大ぶる梭尾貝え濱邊近く處なれば。
かくの如ぶへくぶぶ。物ぬむ所に聚べ。梭尾貝あるべ修験者の目に
まるまるあるとうち微咲べ念玉も笑べ傷をぶぶ。彼丸の壁
の下なる尺八の笛形らぶ。和殿は笛を好る欲ぶ僻目欲と指せべ小文吾も
透ぶくのうべ尺八に某音曲を嗜むにあらねど。近屬俠者といふ
一箇印籠一節切を腰に著ぬ稀なれ。そもそも今は廢すべう。彼はぬる日

誰ぞ。措遺ることのあるとの間に念王は膝を進め臂を伸べて件の笛を掻よせ袖のうち拭ひて歌口を澤山に梵論ことと吹試て是いかなる尺八か。その主定なるべきと今宵一夕和殿に借て寢るよりほかなし。旅宿のうちに甲夜の間より。惱に入りつゝ蚤の腹を肥さんはあまりに奥なり。されども今宵は庚申なり。拙くとも通夜とこそ徒然を慰るとて穴竟の物語あん遊ばせ。月をとらべ。いでゝとのひらけて笛を携へ身を起せば小丈吾はさもかくもあれ。分の隨意慰めぬ。その尺八を要す。と回答て躯を遠く。燭を秉て程を行燈を引提て念王を別室に安寢しぬ。預ねて行李なる彼修驗者に今宵の宿は影護しさまでとて今更に出ぬ。彼術もあり。よしや強顔のひらけくとも他処へ程さぬ疑ひ渠尺八を吹遊ばせ夜と共に月を

俟んとのひらけは心あるてのる狡さ世る悪心はあるとも密事を知べ身の仇に刺殺しくに口を塞んそれ機に臨み変に応じくとも かくもさべ〻ほどせんとすれば病臥せり。奥なる人のうへなりけり。譬へ病難のそれ命に恙あるとも稲塚に帆大夫に。諾ひしるに至まで。いひ延さ是ぬ偏の難題その折に遮られ。骨相圖にそ心憎々是嚮ゆへいとも慌しくそ只うち披見のこゝろ予も復よくそんなやと懷へ〻さしいれとくあいふと左右の袂を掻探て。衣領を披見て振へども涙紙さへ無ものをけて原来途にまく遺せるえん夏は衣物の薄るに黄昏時のいとせちにしく走り還て彼処に遠くもあらぬ程なるにこそ鈍まゝかり見遊莫要なる物を惜むべ死ぬあるべきとて倘途にて人に拾て訴られるべその疑ひのまく吾俤に係べ門より内にあるべとそのうち隈なく立遊まべどそれども梭尾貝に足踏みく仰ざまに輾んとして推駐てよのそも何ぞと取あげくうちみて

更に奥を見えるのみなる不覚へ旅修験が笛を愛でたの貝をそぶ俤ふたゝび忘れ
ぬ。壁言びこの捜尾貝の海中めゝく生あるとゝろ運動さるのゝ声を伝へるそのの
肉を祛ひて殻を留め死物とあるまで吹るまでその声数町の外まで伝へ人の
うへも亦如此そのの居を失ひく他郷に浮浪さるのゝ鱗少の水を離れく。
帰るふようもなるに似たり。況罪なるゝく沈落ー隠れとゝるまで人ふたゝび知るへ
声なる貝の吹まそのの音の伝へる如ー且罪なるを罪さるふたゝまそのの沙汰の逆
なるのゝその罪なるで咎を禀るに威勢に壓るさるまで順へ儔る験もるに世ゆへ
果敢なく恐れ白ふ。そのゝ山伏の萬より拝ふ名のゝこゝのゝとかるに
順逆の峯ふに霽る雲もふ。そもいふせんまでふ食さる貝を擲ちく眼を
睜まで氣を籠く言ふ出さねばいとゝく苦ーに胸に當るゝみの安らゝるに恨へ
かくてあるにふたゝびまで又骨法圖を索んとく遽ーく紙燭ーく門邊に出んとゝる

程に皆とく来ふと外面に置ーく呼ふく。樞戸端と推るに関取在り欲と顔
さ入る塩濱の鰹四郎を先ふ立ーく板扱均太牛根孟六などと呼まゝる土地に
名さる破落戸。三人齊一店前なる。板席に推並べ小文五ふ又ふく紙燭を振
滅ー。氣立ーに入ざまるる三人揃ふく何ぞ。そのゝ坐まよ箕子ぶ抜んとゝふ
せも果で鰹四郎ふ拭肩まと肩に投げ。関取今宵ふ些ぞり。物いふとく三
ぞ佛が臺座をるまく来迎せり且泉に居く拝ぞとゝふ均太も傷よも
鰹四戯言吐ぞもあまー番地取の夜替古に。三人かまぐ肩を入まんと禁く
佶と見えまふ孟六も亦進ま出関取斯皆うち連拉てまつるふ別の談ふあるぞ。
年来和主が弟子ふいとも根が技もう。地力ある。吾們るまべ彼此の辻相撲に
怯を取るぞ大田に現に弟子をのちぬと人が誉れべものぞく。和主の鼻ぞ高う
まるまどけ一日で見限くりとく浮世に倒さまぐ門弟達ふ師匠を破門

その勢をいうとくこの三人は總名代今よりまゝ
人も形ちあらはるゝ頭高ゆ口を利さぬそ忘まうとく悦惚ゆと諸
声立る諸胡坐嘯けば聚ゆ蚊を打く膝ゆ柏子をのゝけ小文吾ゆのく冷
笑ひあるゆ咏や奴原ゆあらゆ物をいはぬ欺総角の時よりしくこゝも相撲を好
みゝ関取をどいるとも世ゝゆあもろゆもわゝゞ寔ゆ田舎の素人技弟
子はあゝとも又ゝとも吾倩ゆ物を缺べゝ宍情由ゞゝ立べ面り望ゆ任ゝく破
門せんその情由をいゝゆあゞやと問ば三人は膝立ゝ居ゝいかゞも知ゝるとゝゞら
昨夕濱里の扮擇を和主がひとり截判ゝる適侠者とゝゝゝ似ゞ山林ゆゝゝ
さまゝ栄崎のみる侍間道ゝゝ逞ゆゝゝる人ゝゝ人の風聞は千里を走る世の
常言誰とゝくゝゝゝゝゆのもゝゝ泥臑揚ゝく蹈まゝる師匠は弟子の面汚ゝゝゝ
破門ゝゝゝ朽をゝとゝゝゝゝ敵ゆは正ゝく妹夫借財でもゝゝ欺ゝゝゝ

さまゝくゝゝは阿容くこと猫の糞踏まゝく花の開ゆは路傍の犯腸のゝ和主は門の
腰脱大田畢竟八幡の取組ゆあゞゝ團扇は怪我の功名緊要の時ゆは山林ゆ
ゝも足も出ぬ藥鑵の湯煮章魚真赤ゝゝゝゝも恥知ゝゞ陰囊ゝゝゝ
駁ゞゝ突ゞゝ成らゞゝは舌を啖ゞゝと訛声高くゆぶりゝく異口同音ゆ向
火を燒ゝくゞゝも小文吾は騒ゞゝ氣色ゝくゝゝ復ゝくゝゝゝと咏ゝ扶揺よ
羽を搏大鵬の志を知ゝゞゝく共音ゆ轉る群雀ゆ嘱賂を養ゝゝゝゝゆは
あゝゞ栄崎ゝく房は敵ゆゆゝゝゆは親の為ゝゞ為彼ゆ夫婦ゞ為貧ゝは
勝ゝゝゝとゝり道理をゝゝゝゝ白徒を避ゝく通ゝは羞ゝゞゝゝゝを知らゞゆ怯
せゝと挾ゝゝゝゆゝゝゝゝは吾身ゆ絶て痛ゝゞ情由ゞゆ似ゝけば要はゝゝ
とゝく邁と追立ゝゞ三人齊一身を起ゝく邁とのゝゞも去ゞゝんや師弟の因を
ゝくなゝゝゝもこの一郷の面ぶせゝる人の口ゆは戸も建ゝゝゝゝゝ他人ゆゝゝゝ後日の

手形に極印打んと鹹四郎が肉を拳と共に足を擧て筋斗を打し。續て蒐る孟六と均太が腕を捩揚て起んと蠢く鹹四郎が背を楚と踏居ゑバ二人ハ足を翹げ面を皺めつ天うち仰ぎ。ある疼痛や腕が拔ん放せくとだうに共音に弱る鹹四郎。かゝれば兄ハ大の字に身を平めつて眼を睜りわら苦しみ堪かし人。いともあき目子が飛も出るばかりにせん背骨が折るゝと叫びあへぎ。おのが名にあふ塩辛声。敷板叩て喘ぎたり。小文吾ハさもこそあらめと懲せし随に手を緩めど。奴原骨にあくえし欽。怒を忍ぶハ親の戒。人の拳を禁るのミならず拳を抗るにあらざ。是やつゞの奴がひに一度ハ許さめてゆけと孟六均太を推遣らしく。ひとろよ上せて外面へそろ僕撲地と突出せバ三間あまり跟々と走跌て轉輾びつ。又鹹四郎を引起して項を摑て推落せバ斜ならず如く爪走して。あつ〻わが身に倒ぎて皆具くハ沿を起ぎ狐の如くちぢくまりて猫の如く背を高うして。やうやくに起あがり。或ハみづから脈を診ぎ。或ハ腰を摩抄手て。膝頭に唾を塗る口を喝め眉根をよせて此彼等く息を吻ぬ迭に手をとりて扶挾くやと諸声に立あがる。鹹四郎ハ蚤の籠に啼く如く舌うち鳴らし。均太孟六疼へ去うぎや。侠骨を磨けバかぶるの四訓ハあれど利生ハあらし間のころさよと呟けバ。二人ハ倶に嘆息し。循環がよかざねバ七難八苦ハ婆婆の厄力に員ても口に勝のぶれるハ恥あきども。いぬハいやに拵飲の地酒二斤ぐ氣をなほさん弱るところと慰める。均太ハ腰を搔捞て。ちつろ遠くと見かへりみつ。等々玉を送しつゝ。とかの間に孟六も足に蹋かけて透しつゝ。あゝござると連緡銭二百遮与せバ引提て誘うて先まはりさうら腰を反して折しうちつれ拉て野干玉の夜のミかよふ味酒屋三輪の杉の棄標げし馴染の店を投て去く足音絶て寂寥たり。小文吾ハ行燈の戸口を出そう推向つて。あゝ外面にひそうけそ。

月参講
高盛蒲中
成田山
月参
大々講中
那屋
小文吾
孟六
かく四郎

薬人宿
古那屋
戸山の妙真
弓太

門の戸磴と引よせて。樞に一重夜に五鼓打添る里の鐘子木も。恒よりも早く心地
ゝ。僕く獨うち点頭ての頃の夜の短さよ。今暮ゆくと思ひ〳〵ふ白物がたり
らひく可惜時を移し〳〵。彼奴がよりも形く貫かり〳〵高声のさゝそく奥へ
ゆくえけめ。ありくば其処ふも彼処よも影護〳〵。もとよりまぐ果ぬ寄思の片胡床
膝を抱てくつぐと泣くば悲〳〵親のるゆ今比いらふ〳〵ての夜を明〳〵ふ。
暗れ処ふわくませば寝くまぬ蚊のくゝんいと痛〳〵限りまでも今宵一夕
堪ぬ田圃を沽て。家を售り財かく贖ふ足ぐまば已あり代りても救ひる
術ありぐ。故ひくれの奥ゆる彼人破傷風の妙薬ゆるば亡伯父の傳法あり。
然まども求め易くぬ鮮血ゆ今ゆるば股を劈て絞て取るともゆるべ死ぐ。それふ
合ゆる女子の生血絶くゆるまば。これとゆるば身を傷るともせんる死ぬ只彼人を
舩ふ乗くく今宵潛ふ走んゆ。ゆく里の出口ゆ水陸共ふ豫より警固の

駿兵ありとぞ。ゆくそを殺害れく脱ゆるともさぞゆるば父の命危し。嗚呼ゆる
ゆまば天つ日ゆよふ滅ある人のうそをかくまで照〳〵ゆるば彼人ゆ是孝士なるを
ゆるば親ゆ是義士ゆまも有繋ふ孝と義の一隅を知るゆる。善ふ與〳〵く
福ひゆく義ふ仗く禍あり。然とく恨むべ死ふゆくまで世ふ幸あると幸る死と
亦その人の吾悪よ。ゆめ〳〵もゆくべるまけり。そを天命と知ると死ゆ縦元を
喪ふとも。ゆの志を移さんや。ことゆるまゆ〳〵く曉るまで計策をゆるどもゆくべひ
しるの皆画餅とゆくん。游我ゆる人現八をの邁ぶりせば又商量をせんゆを在ば
便ゆく存るも便ゆ。いふまべ死と胸ふ問ひ胷ふ荅く憂べくのゆひも飾り
ゆる明の鹿ゆ先くゆ尺八の笛の音奥ふ吹遊む。ゆくべ妙るゆ管の名も思按も
今宵一夜きり。翌ゆゆるべう友のうゆふ〳〵メルゆ人の智をカルゆ久〳〵くうち
フサグ素まを何日ゆナヤスベ死ゆくゆるゆの遊ゆる彼修験者ゆ桜尾貝ふ

換々笛を今ぞ吹く別室も近き所にして隠れぬあへ物の音の慰へせぐ
るくゐの心の憂を添るのみ現さまくの浮世ぞと。もとより心よろこぶるの。いひあらさ
ねど子舎る。信乃はやうあく身を起しく細き燈火よりうち熟ひこぶゆく末と
来しくこをそゐ就く猶ありふ果敢なる露の草枕旅の宿りふ恩義の人を。
連係させんはあろゆぐ嚮ふ犬田ぶ屈度の色ふ生しはひのこの。加旃あるで
の翁へ荘官許召とそれく甲夜過るまぐいまぐ還らぐ俟れぬ人の黙まて
高嘯せ〜物のひぐま皆ろう〜あへぶる乱村雨の刀失せ〜よういく日陰
の花とのみ凋むだるもの病著ふ身のある果へきれこと。縛の難義ふ及ぶと
竹ぶが刀ふ伏くされ死ん豈誠ある人の親子を且くも苦めんやよふ惜ふぬ
命ある。ども栗橋ふく袂を分し。額蔵の荘助ぶ伴へも竹ぶ本意ある危
濱路も亦不便へ玉椿の八千歳ぞと久後ふく憑えて〜女子ぶろ。殊

更ふ恨やせん。歎死やせん。彼ふのみふ現へ小丈吾資ある身を不覚ふ早る。
短慮と後ふのうんかも。虎へ死しく皮をとめ。人を死しく名をそ遺せ死番き
時ふ沿死ねば世ふ疎まく恥ヨかり。ふ尺へきるぶ為ふ弥陀の慈航の掉
の歌謂舞の菩薩の音楽欲。るはそのゆ我又も仏ヌのく期ふ至ぶ力を
把るさぐりの力へわん。ろぐそ覚期を究めろ心を清〜ゆく水のかくぬ
悔へ只ぶろ。特ふ面ぶ〜先考ある灵御送言を仇ふへせねど。疎ふをける
怨ろ。野心間者と疑と身へ落人とるを果く。非命ふ終ぶ後ゆぐ父祖の
名をも汚しやせん。不孝の罪へ九ッの世を易るとも貴ひろ〜。己のみ末期の
憾えそれも過世の悪報と解ぶ仏説迷ひへ煩悩有無を離れく自然ふ任
せん死るを生るも皆命ふゆるせ。とのぶえふのを。ぬく瀧の碎けくも。ぶ人
難て肝向ふ心の痛みるを返せ。いとも切ある壮夫の恨をあるを外めぐも。知る

さへぎるものなき尺八のしらべ面白く吹遊む夜はなほ五ッ半輪の月に代れる篇挑燈を轎子の簾に照さして引そひつゝ外に来つる女あり年の齢は呉竹のよそぢあまりなる孀婦なれど尚黒髪を惜げなく断たる侭の短髪に元結掛の髪掻も目立ぬ無地紹の羅衣に白帷衣を下襲前結せし繻子の帯に結副たる韓組紅なる柳の葉月に山鶏の雄の下垂尾の長庇向上て門に進を近つきし物やうさんと呼かけて門の樞戸をさと引開れば小文吾はおのれひとりなる頭を擡信とつくづくと見れば戸山の妙真なりけり何ぞや甲夜過るに只一人欽何事あれば来ませしと問ば微笑うち点頭いる吾侪のまゐるまで沼藺と大八をゐて来つれど途にて暮んと思ひしかば彼等を轎子に乗したれ吾們も持病の血暈あれば轎子に舁れて揺れんより歩よそゆくも夜行も涼し。よかるなれば来つるに伴ぬ従者倶せんもさながゆく水へだつる推薦客。時をもとやあらんまん巨戸を

開くあらひねと他事なく小文吾は今宵はなぞや折つて来る人の斯多かると欝悒なれど白地に告べくもあらざれば這ゆけなく欵待らんとて来ませしと誘ながら上坐に勧めて躬門の巨戸を内より広く推開けば轎夫等は土間に息杖衝立進て入れ。板席なる框際まで轎子を横ざまに舁居て簾を直と掲揚るにぞこそ見れば沼藺は熟睡せし大八を膝に乗したる縮羅の単衣緋の襦絆帯も段子の黒入茶の交野賓を片締して照斑の玳瑁櫛笄鎌倉様に田舎備ぞ花なるに見えても十九なる蘭し子ありの夜の廃秋にも遭ざる別来し心の痛き色見えて轎子より出んとすれば揺覚されてわっと泣く大八を抱ながらしづかに背を敲著け。家兄猷暑に恙なく家尊もいよいよ健にをはしますや。とでふつゝ低る頭の病しげに撲地と落る釵児も別の櫛ありとうち歎く涙をみせじと背向にありて間れしものと姑の背を看に取てぞ當下戸

山の妙真を轎夫ホをゴろつきく。喃人ぶつや夜中ハ過ぎとも吾倩ハ今宵退る
うちの前面ゐる杭根のわくゐハ南を向く涼しくゑん且く其処ホ俟てよとのホ
皆そろゐろゐく轎子を外面ホ擡出ん巨戸を磴と引ゆ寄く辞し出ゑ扉戸を
又あゐとゐ闔さをける且く妙真を小丈吾ホうち對ひゐよ阿闍梨を臥
房ホハゐゐ欤堪ゑまで炎熱ゐホ恙ゐくてそゐをめ且を年まで媳婦
を孫をも神輿洗ホ来く且ゐ。このハ何ゆ事のゐくゐ〜ゐく本意
ゐゐゐ婢児達ハ処ゐゐと向ホ言れ葉ホ花ハあとも小丈吾ハ両夜の月を霽ぬ
疑念ホ眉ゐち聲め否家翁ハ人ホ誘引く真間へゆゐくゐのまで還ゐを婢児
們を走百病ゐ奥ホハ止宿の修験者のを折のゐゐくて人氣ホく欵待態の疎
さよ納戸ハ絶く風も入ず且くゐホく相潭ゐ扨も婦人の夜行を厭ゐく沼蘭
をも孫く来ま色ハ大ゐをゐぬ故てそあゐめと向ホさをく妙真ハ衣領推

緩めく小膝を進め現推量せゐを如くいとゆひゐくゑるまとゐ凡貴ゑも
賜ゑも男女のゐ〜ゐも親の隨意ゐゐのゐねど年来夫婦睦〜く孫さ
ま〜く牽ゐ母ハ老樂幸ゐあとゐ近ゑゐゐの人ホ美れハ今恥ゑ夫妻
口舌の縺ゐゐ。憎ゐぬ媳婦を離別の断ゐ憎ゐホ来ゐる色の苦〜さ神
ゐゐ〜く誰ハゐゐん〜ゐ代ゐ〜ゐいぬる日の八幡の相撲ホ房ハゐゐ力ホ
肩ゐ力ゐ〜ゐを左ホ右機嫌のゐゐけまど敵ゐハお沼蘭ゐ家兄ゑ慰め
ゐ〜この子の當惑一日二日と厭ゐ程ホ何ゐひゐん房ハを生涯相撲を取ゐ
ゐ〜く額髪を剃落せ〜。昨夕俄頃ゐ濱邊の扨擇和げゐひ〜ゐ力の截
判如才ゐゐハゐゐめゐど根ハ腹ゐちのゐさまゐぬ箭ゐゑホ房ハゐ
憤恨甚〜く女房ゐ〜この確執の黒白を判ゐく母ゐ諫も用ひぬ短慮媒妁ハ
去歳の秋古人ホゐゐゐ今ゐゐホ誰ゐく相潭ふゐもゐ。ゐをを人ホ送ゐく

情由も得告げ返さるゝのみ。わかれば母親の役ならぬ役に倶して来つ、熟馴染て
濃中を裂くべからぬ、この葛の布縫合さえぬ素苧のくりかへし、浮世の義理と
丈夫に勝まぬ女子の甲斐なき、可愛や、お沼藺も磬蟬の鳴より外の術もなく。
心の誠を知りながら果しなきを、慰めて扶けて轎子に乗ぼり、折犬八が跡追ふて
泣くは理り、母と子の別を然蚊が知らせて、袂推ろ袂を振拂ふて、立ぞれもせで
年もせで四つといへど、その冬の師走生れの年弱なれば、まだ乳房をはなさ
ねば、二葉の小草なる、その森の蔭なきをしくのみで、ろ延ありし已に蔭みを合轎に
乗しくなりまいらせしが、外祖さる許とくゆるく美衣をきせられん。
物賜らんと餘念なく膝踊せし。稚児の心は智恵なき聖平神手門まですゝむ
母親の膝倚子借て熟睡せし夢の浮橋中絶る歎を知らぬが歎きのひとつ涙
の種まく時なくに、憂るい毎に生ひ出る草とやいはん。愚癡は女子の苧宇車

鉄繰返し、又かへしても返らぬに難れ離別の情由、答てにもなきとらの、甦るにもかく
にも執なくならしまねとのみで、酸鼻る姑の言葉を露を結びそえし。沼藺は
よくぞ泣沈む小丈吾はつくとうち啼く嗟嘆いふ言詳なる大家の口状、太く
あるを沼藺は又やなかりのふるまはひを心にのぞみ、外にある深き意味は
わきまへいふぞと向ひながらく頭を擡女子の三人五障と共に三從と共にいふなる。
ならうへにつけ良人に理あれども情なかりし四年以来声立ていひ懲されしとも
なき心を小めく家の内風波立ぬ。取る楫の朝な夕なの舟日記せしる業も人の
手に任せぬまでに暇なき馴し住ひ川添の門の柱は朽るとも死なれ
ども名ひしある名ひきを飽もあかしもせぬ中を去らん還る親里の國もえるべきらん
と只願しは両方の心こゝろの和らぎ、胸騒し風雲の舊の峯上にかへるべ
かれらくん迷の来し涙の雨やかく過て見よがしに袖の乾ぬてん吾儕は撲まし傷

らまいくその艱苦を受るとも恥も厭じ恨みもせで品よく応接しまつらぶ。十日の飢渇ふ糧を獲く千年の齢を延んよりこれ有まくる欽びの又あるべしやとだらまる涙坐めたるり落く膝ゆ抱く子も袖濡さる。隻手穴ユーく使まぬ痞壁ざふ撓げるを當下小丈吾い又紀ろ釋く氣色稜ろ行燈の灯光ふ妙真を佶と見く大家離縁の趣い大くとまろ紀ろれだ。今ハ一个の難義あり。沼蔺ハ親の女児ス某ざとろ紀ろく房八ゆ妻せざる紀。又この家ハ親の家ス親の他約ゆ離縁の断ヲ羨引ぶ道理ふ背ス況大八を幼稚ゆ母ふ隷らぶ紀ゆまを老父ハ今宵還らん欽明日も明後日も逗留せん欽その時日ハ定らまぬ留守ゆらゆ女弟でも一宿も留めて今宵ハこの侭ゆく帰りく親の在宿ゆまらん日ふ又出ゆ来ゆひね某が知るとろと敦圃ゆく立んとゆまぶ欽を楚と引とぶ阿男。そハ辞ぶたぶん氣をとゆま

鎮まゆ奥と推房く鼻ゆまかま姑と婦の中のゆまを紀ハ世界の不思議と人ゆ
いぶ。ゆ沼蔺ゆよぶ老実ゆ房八ふ弥まく孝約ふまゆまく又房八ふ
弥まく憎まぬふをいまぐう去らまして外ふ見ゆまぶ紀離縁とゆまを
夫の意地一旦立く後ハ又治る術のあるゆせん縦釜こハ在さぶとも
ゆまを釜ゆの家ゆまを紀。釜々の宿所ハ釜こハ在さぶとも
留守の役受ゆまを紀ふ道ゆまべ。又大八を坐艸のうゆより左の巻の人ゆ
ゆまで物を含ゆまとかまハねば在弱者ゆまく持あまく母ふ添まく来せ欽と
ゆまくふゆや知らぬ紀れど在弱の孫ゆ可愛さの八ゆふあまして紀ゆふ紀ゆ
ゆま母ふ隷く来せゆま子ふ覊さまく房八ぶ武紀ゆまを折まゆ。孫共
侶ふ婦をゆも召ゆさせんとゆまぶ掃頭の花欽堂ふの中ゆ王欽と一日も
側ゆまさぬ一個の孫をゆふ留めく祖母ひとゆを別まく何紀ハ還らるべ紀巻ハ

ともあれかくもあれ年歳はいまだ幼く智恵もなく身長も伸て庸尋の六ッ七ッなる假子にも劣らぬをなむ、その里の子共が綽名して大八とのみ呼ぶ程に祖父の命じ賜ひし真の名をば呼びもせず。園宅のものまで呼熟し。彼が渾名の大八は原是車のたがみにて先輪といふ謎にて、後に暁り疎しく呼ども、あの人ど口癖のなほらねも現名詮自性のならひ、巻の人となりにならうとのみ念力も届かぬ醫療加持祈禱神に佛に願言をかけしも、四とせまでやうやうはかぬ要なきのまでなかりく、なう告るに隠るる心の誠を以て疑なく大八を留めしとなれば、渠は旅客房銭を出さず渡世に貧て宿貸さぬ犬田との獨行ならば、わざとなる母と子同行二人かくも推辞ならぬ歟といひくいと口雄々しげに淀みなかりける辯舌さへの憂ひに濁さず澄まして辞の歩水渡しけり。現船長の母なりけるを小文吾は信乃がこの今宵に限り手遍の難義女弟なるをとく留めおかまくいつで密議を

知るよしへなかりしかば、ちからなく返されののみと、ねよめをしけれど今妙真が理證て説ども屈せず。冷笑ひ口賢しうもいふままに客店のなりなれば旅客をいとど宿借る店なれや甲夜過て座席も竪し宿さぬに餘る旅客を推辞てまよふになりけるなりとぞなきのが大八を祖母に倶して還しもせん。沼藺を留めよといひさし、渠今親の家ありとて返さるとも離別の状あらし。離別の状を添られねば是私の逗留なり。縦同胞なればとて男女はその差あり。傍に人なき留守の家に尚ぞところ兄妹のを。留めて暁までの田の糧をとり兄ながら影護し。枉て今宵は将と還してこの状願しく復来ませといひせも果ず妙真はなをほとどうち咲ひ原来あの男は離別の状を望しさまに云云と固辞なる歟ならるらんなれ。一文不通の夫なれども妻をさらふ離別の状を取せざるのあへからず其を出さぬは吾倚が情誼遮与せば再び結れぬ離縁の状なくにありといひつ帯の間よりして一通の状を取出し、ほとり近くさしよせるを。

小文吾は受取て披けバ去状なるにぞ、最裏に途まどひ迷へる犬塚信乃が骨相圖を得と駭く當惑の難義ハ、いかにぞや鏡影ハ忽てもなく騒ぐぞ、その卷て側に措きこの許なれ書ざる。かゝる離別の状ハ三行半世間普通の文言をとこの骨相圖に換たる房八が所為なる歟、亦唯なり其の所為なる歟と詰れバ妙真頷きつゝ目成り怳惚なる大田とのそれがし身を知りながら、我の御所より火急の穿鑿ある犬塚信乃と守りんを含蔵るものあらバ親族縁者も罪せられんと厳に御らされは、市川の郷のさとびとあつまり、さるべきのみならず、その女房をとる房八をと。理なしとのゝしり、その去状を受納めたる沼藺ハさらん、大八をも留めおかず送り来ぬる。吾儕も本意ある心地ぞせん。その去状を受けども、荘官許にて参りて訟庭に浪速江の、よしあしいはんとまさへしおかんとす。身ハ事をも好めかぬ、状否いつでも事を好んとするが沼藺を受とりもの歟、それハ又縛の難義あり、とはいふがその去状

なく許さるべき歟いかにぞやと、向ひて謼らせしかバ、小文吾ハ困じ果てうち点頭き大家さのミな急りそ、ひそかに去状楚と納めたり。沼藺ハ往らん、大八をも今宵は某預るべし。有無の答ハこれ父の還りし後と、房八に告げ侍つあひ稀し夜ハいと更たれバ。よそおせぬ、と稍うち解る辞の花柯折まくハ脆き袖の露。妙真ハ目をおし拭ひ、扠ハ納得なされし歟。むかし泣人ぬるものぞふりの、人送りに身の為をこそ吾儕に怨ハなけれ。かの成現若しれハ浮世の境界三年以前の秋の比亡夫に後れて頭髪を剪て形貌を烏髪尼、妙真とよぶ逆朱の戒名血脉さへに受しかども尚年あれバこれ子夫婦の成に浮世を棄かぬ、朝夕家廟に對ひ看經の暇もなく日毎の出船入船の舟子の駈引、廃物の水揚、世帯を執まバ、舊の名の戸山と人ぞよぶ。呼ばず、不否妙真と更たりと告れども、又忘れてや、或ハ戸山よ妙真よと道俗二名をひとつに合し、遂に戸山の妙真と呼るゝハ、いと烏滸なれよりに夫ともなり妻と

向成蓋清中
小文五
念五
ぬし

姑娘の哀
別夜笛
憂を増
御寺院
妙真
内八

ちまた婦とゆゑ姑とぞ呼ぶく縁にあらうぶら本末遂ぬ産灵の約束事ゆゑ
あるめ人の乞ハ善も悪もうちつるくちまるめのちうねば只鬼々〻乞との婆ぶ兎
毛だるまも痴れる婦を追出せ〻と人のやいろんこれも玄孟の諄言ゆゑ紀然ぶ
吾倅ハ退るゝ〻お沼蘭ハ陜乞心ゆゑ病煩ふく親同胞ハ劬労をまゑ被ひて夏
の夜のいぶさもくとも大八ハ衣推脱〻く寝冷〻く風ひ〻煩〻ゆゑとをつれば
泣腫せ〻目を推拭ふく頭を擡年来のれ高恩亶ゆゑ孝行を竭〻も
沒せまぶもうちるれ別ゆゑそゆゑ行ゆゑ真夜中ハ行ゆゑ郷ゆゑ
あるゆゑふくゆゑ選〻まるゆゑ乞苦〻さよとのひみく人をも落る涙をもとゞめ
ゆゑぞ共倡ハ惜む別を慰貌ハ又吹遊む尺八ハ妙真ハ耳を側く彼笛は音ハ
鶴の巣龍焼野の雉夜の鶴凡生〻活物夫婦の哀別親子の恩愛いづれを
疎ゆゑとせんあるこゆゑ別ゆゑ歎ゆゑ憂ゆゑのゆゑぶやんと將〻く涙をゆゑ

紀〻く小文吾ハ告別〻く立鳴の翅ハ遺き一滴濁さぬ水ハ任〻ゆ見送る兄ハ
辞ゆく妹をよと音ハぞ泣く心細けれ繁桟の門の樞戸推開ゆ妙真ゆ外ハ
出ゆくあやくと呼ぶ程ハ轎夫ハ遽〻く轎子をのく〻く早屋ゆ乗ゆぞ
やと促せば足ゆりもせぐ頭を掉廿二日の月ゆゆ出ぶ乞天の色づまぐ
夜ハ既ハ更ゆあるゆゑ市川へ選ゆぶ乞豫〻く用意せ〻今宵の宿ゆゆ乞ハ
あゆ吾倅ハ跟ゆく来ねと竊ハゆゆ〻く轎子を扛〻く赤羅引東の
町へとゆぞげとも進ゆかゆる足引の山路ゆけ入る心地〻ゆ迷ゆハ胸の私雨ハ
露けき袖をうち合〻ゆゆ頭を傾けく〻ゆひくぞ行ゆ乞ゆる。

第三十六回　忍を破りく大田與山林戦ふ
怨残含く沼蘭四大を傷害を

人さまぐハ志ゆ道引ちぐく〻ゆる折均太孟六鍼四郎ゆ甲夜の迷恨を復

さんとく古那屋の門ゐ潛来つ或る戸ゐ耳をよせ或へ戸節よりさゝ覗けば燈燭あるく声さえ時ゐ早し。と退たく耳語めくゝ後方よりこるゝ或ゝ者あるも見咎めゝまじと三人齊一驚迷ひく庇間よりも背門のくゐぞ隠れける。程ゐ山林房八へ母妙真ゐ送ゝゝく女房沼蘭を去まーかど彼方の回へ答もひゝ彩くゐ又ゐよーわまじ小文吾ゐ對面ゝく昨夕の確執を果さんとて更闌くゝ只ゐ戸口ゐ近つ寄くゝ裡面の中ゐ窺ゐゐ小文吾へ沼蘭と端居ゝくゝ歎く声。喩を声。々と蕭ゐゐ仏ゐ聞ゐえゝ。その絆の起ゐよく推究めくゝ後ゐ裡面ゐ入ゝめと尋思ゝ門の柱よりゐ忍かけく身を欹て竊聞せゝ。かゝぶーゐ知ゝぶーく沼蘭へゐゝ多く涙を禁め不慮のゝよゐこの刃の厄難答てさまゐ選ゝせゐひゐゐ何とまゝーくゝゝんゐゐ甲斐ゐ見へ現女子ぞとゐゐ。ゝゝやよ家兄よ見商量を仕ゝくゝ果敢きく為ゝゝんよゐ大八を納戸ゐ臥さく。

答てさまゐ成候仕ゝん嗚呼胸痛やと身を起せば小文吾吐嗟と立塞ゐゐれゐ沼蘭へ何知へゐぞと辞せゝく禁ゐ呆れく顔をゝち目成りゐへ狡猾ゐ物咎めゐゝくゐ来ても親の家納戸へゐく科をあゝぶといへせも果ぶ頭をうち掉り縦親の家ゐゐゐ留守ゐゐ兄ゐ隨よせん知ゝぶゐ今宵へ寅申守ゐゐへ祈願のゐゐくゐ齊戒すれば親類でも他家よゐ来るゐゐを留めぶ。況奥へ一歩も許さぬ関の戸を開くゐぶ心願を空ゝゝせんやと敦圉ゐゐ見へゝゝゝへゐ只子舎ゐ病臥せゝ信乃を見せぶと慢ゐゐひ黒むゐぶ涙漣ゐゐへゐゝ言ぶ。今宵へゐゐぶ花妻ゐる狡人ゐへ隠ーゐゐも妹ゐ隔のゐぶ見へゐゐと怨ぶ進めぶ眼を瞪ー尾陋の推量奇怪ん祈願の外ゐ物もゐ一豆鎖ゐゐ出居の関戸疑ゐゐく許ゐぶ見へ狡強く納戸へゐんとゐゐぶゐゐ齊戒を障身ゐゐゐ只是悪魔の所行ゐ似ゝゐ。ゐぶゐゐゐ置とゐゐゐぶ不便ゐゐとも親子共侶檐下ゐ

立く夜を曉せぶるぞと罵懲しく搔垣を引立ろ。ゐまるく戸口ふ推あ張せぞ。あるぞと叫ぶ母の声ふ驚覚る稚児も共音立てぞ泣叫ぶ小文吾ハさりてそと忍ぶ足ぶ共侶ふ弱る心を鬼ふ心泣声奥へ突せ。と樞戸磴と踢開ぶく推答え。と為る程ふ外面よりも洗みく沼蘭ぐ肩尖推戻し。肉りと肉ふ入るめあも。小文吾ハ目戒佶と見ぐ房ハ寄る狩小文吾狩何とありつく真夜中ふ向ぞも知ぬ。ゐる確執の後段別ふいぶぞともあも。他人ふあ予そ潔白く果さん為ふ夜をとめて。そ見ぐ来ゐる狩ゐゐゐも。と送の向荅由断せぞ。かく苔く房ハを樞戸楚と引閉たも。當下小文吾ハ舊の席ふ退ぞく一刀取く傍ふ引著。俟間ゐゐぞ房ハハ拵光ゐも長腕刀ふ四下も陝ーと裳を褰て續て進む前房の正中小文吾ゐゐとり。近く向膝あふも高蹴跪膝突つけく疾視ゐも。沼蘭も忍ひみゐるも更闌く。来ゐる良人の勢ひ兄も有繋ふ氣色ぞゐ心の底を汲ゐく。ゐ騒ぐ四月ハ荒磯

ゐる浪よゐ危さ一期の浮沈和諭るゐ。ゐも泣ふ啜上ゐる大八を横ふ抱ぞて合。生涯乳房も細る。量の苦労後ふ立ゐ退ぞゐ心届ぬ片ふ業ふせんぞもく。行燈を壁の予とゐふ推退けく。そと搔起も燈心の丁子頭もそくぞのめゐる。ゐまゐや滅んとゐち歎く房ハ内のまをぶゐもかくぞ脱を扼く声をゆゆと立小文吾。和郎も男子ゐぶ栞崎ゐく踏まゐる。恥を恥とゐく。辱めても窘めても。ゐふひのゐ兒臆病者を。歔ふふ取ゐんハ大人氣ゐ月ぞ此二兒も伊ゐもせゐるのあも。ゐく女房を去ぞとも渠ゐ呼藏の衣裳調度をゐぞ返さゐば後日の異論奥歯ふ物ぞ挾ゐくハ慾ふ轉ぶと人もやいんゐ。ゐ返さんとく齎ゐ。物撿めく受納めゐとのふを小文吾伊ゐも何夏中ゐんとありひ。ふ沼蘭ぐ衣裳を返さんゐく狩人騒ふ更闌ゐる今宵ぞゐふ限ゐるゐハ量裏ふ妙真刀祢ふ答ーぞくゐぶ親ゐゐぞ還ゐねど枉く妹を留めゐゐふ情ある姑の面ふ顧ーす志

のゝ回答ハ親の選りてこそといひつるをきかずや。と向せも果ず冷笑ひ明日久
らん欤明後日歟。生涯選ぶで果ん歟のと云罵る文五兵衛を候とそいふ
まで候るべし。これも亦男子の今返さんとてもて来し物なり受らまぞとくで
宍止ん流行摸様の京鹿子美濃の八文飾磨の褐沼藺が秘藏の衣の中ゟ。
和郎が欲がるものそれならこれハ見認らずやと向ふへぐ懐より取出したる血つきの
麻衣なりこハいかにとさしよせたる小文吾ハ見てうち驚き正しくそれと掛るほどを。
拂ふて左ゟ取あげ。しらぞ欲からん欲るべし昨夕入江の蘆原まくとのゝ小文吾
膝推進め。これも甲夜闇黒白を別かぬ。句。背肩にかけたる一包袱。句。誰とも知らず
後より。句。引とゞむるを。句。振拂ふ。句。送の手煉も如法夜ゟ。句。引綻せし袱の裂目を
漏てうへ送るとの衣。句。それ知らずともえて突退け。飯宅の後もてゆくめぐ心もつかで今
まで此句。うちつけて胸が潰る欤。句。原来その折癖者ハ房八汝が所為なりけると

今ぞ讀る離別の状。句。三行半も夜賊遠見黄昏時ゟ出てゆくる途で拾ひて
又途で母ゟ遮与せし信乃が骨法圖。句。見つゝ機密をみな知く。句。女房去
りしハ宗の注連連係せざりぬ身の用心そのつくゟ隠せし喪家の犬塚外より
洩て出物もなし。さはさまざくの好甲斐ゟ賞銭を己が酒の價莊官屋敷ゟ驚れし。
親の縲絏を解んとあるが信乃を搦て吾倚ゟ遮与せ否小さうけ汝が贅託罪
人舎義の罪でなハあらぬぞといはせも果ぞ腕刀の鍔下握て瑞を突立この期ゟ
及びてなほ陳ぶるや拒バ奥へ踏入て索を被んぞいふにぞ。と送ゟ怯ぬ蝸牛乃。
角芽立る争ひゟ沼藺ハ悲さやるかたなく慌迷ひて兄と夫の間ゟ入て推隔
ちハ不覚え外ゟや洩さん家兄よ賢き心ともいひあやまちたるふる今さらめて
ある家なるの大人の縲絏も人の所以なるが親ゆゑハ換るものかハ。これぞ夫子も亦
心つきし。その難義を幸あり自ゟ罪人捕へて何ゟせん磯うつ浪も當て砕け。

雨降りて壊も陥りて名ひしるべのまふのひ果てゝ月の火も滅え迷ふ
睦ま相潭ふく親を救ひとゞまるべ。こゝに見ふまゝ辛ひの又わゞ〜やと熱涙
岡く。彼方此方を和諭つ声うちくり。泣涸らす簀子の下の蟬も霎時その音と
とゞめけり。小文吾八今さらふ事を好むふわゝねども。さう移く怨む房八ふ既ふ
大事を知りまゝ〜ゞ忍べと親の箴る刀ふ被ー紙索さゝ今を厭ふ慌あゝぞ。
ゞ顕身の息ある程八いざう彼人を遮ゞ此二も退ゞぞ立ゞ殺ん
と刀の柄を握詰る指の汗ふ鞘釘も濕る可え當下房八ゆゝく焦燥く。
ある見ゝ〜ゞ女子の截判泣ゞとく口説ゞとく。宝の山ふ入りとゞ〜ゞ空して
かゝらんや。喧嘩の側杖打まゝより。其処退ゞやと敦圍く。衝と立さまふ礙と蹋る。
仇頭狂ふく大八ゞ腹肚を蹴くゞまゞ苦と一声叫びもあゝぞ。そゞまく息八絶よ
けり。沼蘭もその子を抱るまふ横轉輾くよゝと泣く房八ゆゝ紙物ともせゞ。

信乃はまゝ〜く子舎ゆと進む前面ふ小文吾ゞ立塞るを抜打ふ巻ゞ尖く丁ゞ殺
刀を鍔ゆく受留ゞ紙索を断ゝ。小文吾八今ゞ仇ゝ堪忍の二字も反故と
恨の刀尖抜ゆゝ丁々と鋼を削る迭の大刀風四下を蹴立く戦ふう沼蘭八
ゆう屈く身を起〜く見ゞゞ子を息絶ゝ。ふゝふせんかすやと泣ゝ〜ゝ
見ゝまゞ兄と良八一上一下と砍結ゞる生死の際この子もいと惜。彼首も危し。
夫子ふいまゝ子を殺ゝまく〜ゞ勇ひゝゝゞ恕ふ生る甲斐る死火宅の苦ゝ刀の
下ふ玉の緒の絶ゞ絶よと忽地ふ志を勵〜くゝ死抱ゝる大八を撲地と投捨
身を起ゝ良〜ゝゆまゝく此二も擬設せゞゝふ情う〜短慮え物ふゝ狂ひゝまふ
らん止り見と呼ゝく打ゆゝ〜ゝ白刀の中へ入〜ゝとゞまゞ小文吾八ゆゝ退
けと疾視く。ゆゝも立ねゞゆちゆちと捕箭禁る女の念力。身を投ゝく良八の
袂ふ携るを遮さゞ煽り落ゝ房八怒まゝ眼を反〜く碍ゝまゝと蹴倒せゞ并撥矢と

白刃交る
と見
小児謀て踢
殺さる
房八
大八

小文吾
犬士

折花く髻結断離る乱髪縺らく臥つも足を抱げべ踏久さまく起んと
しつる頂の上ゆ見く良人の刀踏入く小文吾を殺んとうち振る拳ねて沼蘭が
乳の下碓と砕る炙所の深痍ゆ霎時も沼堪ぞ苦と叫く倒まけ見へと
駭く敵の透間を沼ゑと進む小文吾が肉一ろ白刃の電火房八ぞ右の
肩尖ばゑまんと砕割ぞ令くる刀を戛と捨く尻居ゆ撞と平張仆を
再び駆んと振揚る刃の下ゆ房八ぞ。やよ等大田のあとあるとせらく禁て
左る我突き頭を挙ん蜻蛉の息吻あくぬ深痍の苦痛小文吾ぞ訝一と
見へべ些も由断せぞ血刀肉りと取る一く片膝突く佶と疾視卑怯ぞり
山林いそのあくべ疾いるぐ。ぞの期ゆ及びく何ぞ少んと窘まべ眼を睜る。
その疑ぞ理りるまとども。るぶ本心を初ろ。諦ざび特ゆ義を守る和殿ゆそう
るまをと砕ぐき且ぞの痍をとる我抗まべ小文吾ぞ沼蘭ぞ

刀の濃血を拭く遽く鞘ゆ納め。単衣の袖を断離る。ゆ拭と結合く房八が
瘡口を楚と巻て端一結びをれ房八痍ゆ浅かり。いるるゆあるいぞん。ゆるゆそ
や山林と呼ゑられて息を吻る。嘯阿闍男大田殿栞崎ぞく理不盡ぞる。るぶ体ゆ
豫ぞり。和殿ゆ怒を愛さく。ぞ難く難我を救んと必ひゆるれど事成らぞ親
の諫めと堪忍を守くるるゆ。ぞもぞく。ぞゆ有くるる大勇ゆいく羞て立別れつ
さりとく已べるとるぞ。るぶ母ゆ豫ぞり。示あゆせ一ようれべ沼蘭を離別ゆ
假托て甲夜ぞり和殿の氣色を試ぞ今宵再び推く来て。ぞるく本意を
遂ゆると告れべ小文吾眉根をうちよせ。ぞろ沼くて一山林。これゆ沼蘭が兄と
いるとも和殿ゆ大恩あるゆるるぞ。然るをその身を殺ばまでゆ志を盡さるとー見
疑ひの一ぞり。縱和殿のぞろるて。可惜命を隕もとも今宵ゆ逼ぞ一るぶ難我を
救るべきよーあらぞ見疑ひの二ぞる。故わやと問詰しべ房八ぞて声を厲一されべ

とて其ゆゑを言ひぐくとも仏法の輪廻の説因果の理物の本ゆゑ人々皆ひぐうくゆゑ一切ものみざるれば果敢なく今一般の懺悔告るも面なれひぐるぐる一昨年の秋世を逝りしぶ父の病危うし時竊小母と某を枕辺ゆゑ迫つけられいたの小厮より。おのゝわるゆゑ上りく一子房八成長りぬ。ひぐ齢五十を超て一期の望分ゆ過ぎり。あれども。あるゆ恥ることゆれば戸山ハさて房八ゆも素姓を定ゆゆ告ざるれ。ひぐ冥土の障ゆるぬべしよりく竊に生るのを抑ひぐ父ハ杣木朴平といれる。安房の青海苔村の百姓なれ性とく武藝を嗜を殊更ゆ侠気あり。この故ゆ故領主神餘長挾ゆ光弘朝臣譜第の忠臣金碗八郎孝吉ハの武藝を頻ゆ景慕しなる。剱法を受んとく彼家ゆ往るゆあり。かくて又年を経て。佞臣山下定包が神餘の執權なるゆより。淫酒を勧めく民を虐げ。逆謀萌を見せども光弘ハれを曉り

ゆゑ金碗八郎ゆ諫るゆハ皆追ひく。その家竟ゆ乱れぬ。ひぐ父を是義氣ある人なり。里人ゆ為金碗氏の為ゆ瞋憤ゆ。ひぐ定包を殺ひんとく。同志の友ども。洲崎三垢二とゆ壮夫を相譚ひ彼定包が遊山を探知ひ落羽曝ゆ埋伏ひく乘る馬を心當ゆ射く落せひハ讐ゆ。領主光弘ゆぞをハしける。三垢二ハ當坐ゆ殺ひ。ひぐ父ハ領主の近臣那古七郎と血戰して七郎を斬仆せ。ひぐ。その身遂ゆ生擒ひく。この條の錯悞ハみゆ定包が奸計なれ。ひぐ父漫ゆ名ひ迷ひく。かくも領主を犯せひ金碗氏ハ里見を佐く功成て名を逐ひ後禄を辞ひく自殺せひ。ひぐ父の故とぞ。ひぐ。當時五倍ハ十四歳母ゆ曁裏ゆ為まるぬ獨安房國を亡命ひくこの地ゆ漂泊ひる程ゆ里人ゆ汲引せられてくなるの小厮ゆ為ゆふけり。ひぐ。年ゆまゝ心成切て仕ひぐ先主人愛ゆ報ひぐ。ゆゑなりとゆ。ひぐ。

男児を死しるを吾倚を女壻ゐたるぬ。ゐ房ゐ去歳より通家ゐあり。房八が
男丈五兵衛八那古七郎が弟なりとぞ。今歳ちぢめく灰ゐ突ぬ渠その壻兄
の雙ゐる。杣木朴平が孫なりを伝父も突ぶいふ。てその女児なりて阿容こと
房八ゐ弃眉ちぢ死ゐを復さ且ゐる疑ひす。ゐれねばこそ口舌もあるを且ゐ怨を
隠しく好を結ぶ。終ゐ子孫の患を送さんさまびとく沼薗が怜悧死人も羨む
媳なるゐいちえ毋く挙ゐる孫ゐ乳房を放さくゐ去せんいといとう忍びゐ死
ゐざゐちん那古が弟と知ぢしく通家ゐあるゐ悪因縁孫が拳の人なるゐ
ぬを三世の後まぐ怨恨惹く。彼刀祢ぢ（神餘那古金碗ゐ）の崇欲とゐひ屈しく病
煩ゐく。ゐ期ちく。ゐまゐ人の怨を解んとゐぶ陰徳ゐゐをれなり。
房八ゐ親ゐ代ゐく祖父の為ゐ汚名を雪め彼舊怨を釋とゐぶ寔ゐ孝
形孝行なりん且房八ゐ祖父ゐ肖ゐ侠気あるく武藝を好り義のゐゐ

命も惜まず戸山も心を雄しゐ。ゐく。ゐぶ子を諫奬しゐと竊ゐ遺言せられゐ。
父ゐ義理ゐ惺憾さゐ既已かくの如しゐまゐ親ゐ及尽ともその子ゐく志を嗣
ざるぶ死やとゐひ起しゐ。祖父の汚名を雪ん為ゐ杣木の杣の木篇を除く下ゐ
木字ゐ相合しみづゐ山林と名告れるゐその比ゐゐ死さゐゐよりゐぶ
男子丈五兵衛殿親子の為ゐ人ゐ異形ゐ志を竭しく後ゐ親の遺言明々地ゐ
告ぶやとゐくども折もあく實義をあるを術もあり。さまびいぬる日八幡の相撲へ
和殿と目星ゐ指きし。修験の募ゐ任ゐるゐ。吾倚ゐ絶く勝員を
ぬるを技も力も和殿ゐ及ぶべくもあらざまども。怪我ゐも勝ゐと念じゐ。果
しく員しゐ敗びゐ。何でゐ孫ゐ死ゐふくとゐひ立しゐ娼るゐ。そ城ゐふくとゐひ立しゐ娼るゐ
のゐかくきのゐ祇園會の神輿洗を観ゐやとくゐの濱ゐ来く遊びゐ。獄父五郎
兵衛を訪んとゐひゐ。入江橋を渡る程ゐ獄父を遥ゐ水際ゐ。蘆分舩の中ゐ

かく怪しき両個の壮佼と。うち相譚ふゆゑん端なく呼も立て所にその手をとりに
近づきて。密に窺ひきけるに犬塚犬飼値遇の奇譚和殿も亦その相
似たる玉さへ痣さへあるよし我ひそかにきゝしより感激して今更出るに出かねし蘆
原に躱れて獨情おもふに。こなたも亦相似たる玉と痣とあるなれば彼人々の隊に
入て世の豪傑といはれん為過世ありてこそあるなれば義を結んと願ふとも許
されよしやさん同盟の義は協ずとも。當所は千葉の采地にて。滸我の御所の御方
なり犬塚犬飼穿鑿せられて難義に及ぶとあらば竊に男子力を勠して。
これが性命を隕すとも。その危窮を救ばや。とおもふ心はこれ父の遺言を果
さんも只この時にあるべし。と竊におもひ決めたるに。かくてその日は暮て彼人々は
古那屋へとて。あるじの翁に伴れて。和殿は迚も留りて。件の舩を推流し血つきの
衣ども背負て。立去らんとせらるゝにぞ。あまりに遺憾ければ卒とおもひて蘆

原より立出て某も思ひ得ず所に恍惚に引留しを和殿は癖者なりとて。振拂ふ
たる勢ひに些しく呼もかけられず且く挑争ふ程に吾儕は膳をいたく打れて。
倒るゝ間にそれと走去られ跡に遺せし麻衣あまた倘他人に拾れ
なば殃危其処に起らんと思へば躬らこれをおさめて更闌て宿所に還る。母に
もかく告ず。ふと犬塚生追捕の事をきくや荘官より徇られたる當下これ
又あらかじめ。これ男は客店なり。彼人々を舎藏ふとも人の出入多ければ隠す程も
なく顯されて犬塚犬飼のみならず。あまつさへ親子も罪せられん。されば今更に
義を結びし人々を出し遣るべくもあらず。所詮今これ命を隕して其処にて危
窮を救はずは竟に脱るべからず。この入江の蘆原にて。つくと觀念しに。
彼犬塚が面影はこれ面影に似たる者なりされば己この頭をもて犬塚生の首
級と偽り滸我の使に遞与したらば獄舎に祟も泡て犬塚生は落しつる。

便宜にまぶかぬのわらび。然ども似ざる所あり。吾は相撲を好る故に額髪を
剃ざるその面影は似ることもあの俗まくは斯ぞと心つくは雲時も
わらじ八幡の相撲に負されば生涯土俵に足踏みじと寓言しく今朝
俄頃に額髪を剃落させ鏡を把く照しんぬれば年紀さへ面影さへ犬塚生に
よく似ることよりていよく深念を決し竊に母に云云といふよりを若しく母も
涙さしぐまれく許さべくもわらざまれば。己れも有繋に請うまく自殺の遺書さる
程に母はまもも嗣窺く禁めくしと思ふまく許されけまるば
母も亦我ぞに怜悧く男魂あるふるる。今生の告別ぞるまに皆いひ盡ふ縛の
中を知らん為に俄頃に沼蘭を離別しく親家へ必ずといひちらく離別のまま
母に任しくまるまるこの濱に来つるぞ栞崎まてやうまるく和殿が宿所へ還るに
あらぬ折ふし往返の人もあり。己れ駿まるんゆへ便宜の場へ和殿へ身かりまに意

あるくとも犬塚生ところぶ面影の似ることを視る目は誰ゆもかりぐ。己れ死るの
後己れ頭のく彼身かりに立むやと心つくるにあらじと思へば此三も躊躇ぞ
濱里の確執に假托く理不盡に讒罵に蹴倒しくも己れ争ぐ親を泣て
堪忍ぶその孝心あはまべふるく本意を沿遂ぞ別まるる途より酒を酌んとく
只管誘ふに観得を先に立つ先し拔ぞく取く返しく稲塚の辺まで来
つるぞ和殿は既に難義あるを滸我より犬塚追捕の大将新織帆大夫と
ゆうんが鞍兵にとりまを囲まを剌山嶽丈五兵衛殿は縛らまく牽れう吐嗟
と胸を騒げどを救ふべくもあらざまれば数蔭に躲ひく一五一十を見聞く
かくく和殿は扉口を脱まく家路をさしく遽しく去まれ跡に一通あり取揚て
見れば彼骨相圖なり麻衣といひ繪圖といひ不思議に他人に拾まぞ
てまに入るに縛の孝に今宵は決しく本意を遂んとくに心に勇あり豫て示し

ありしころ中宿に赴れて。竊に母の来ぬる程俟て云云と密報て彼骨相圖を
遞与せしハ和殿が心を騒して今宵發足ん為なりしに甲夜の間に。
背門の辺に潜来て犬塚生の大病も。和殿が若心もよく知りて願ふハ阿舅
大田殿。わが頸取て役にこそ。山獄父の縲絏と犬塚生の危窮を救ふ手段哉
めぐらせぬるに。怨を釋としるなりともを一期の功として。昔杣木朴平ハ定包を
殺さんとて領主を犯して刹那古七郎を撃とめ且その師なりし故主なり。
金碗氏にもこの故に腹を切せしめあれども今ハその孫房八が云云の義烈に
よりて孝子義男の冤枉と。山獄丈の縲絏を釋ゆると口碑に遺しめバ
らば祖父の汚名を雪むべく父の遺訓も空しからせず死して栄あることぞ
百歳の壽を保て富貴の人とならんよりもましになるべし。やよ身乃
終びに就てなれ不便なれハ沼藺大八親子三人がいまで日にあちこち所に命を隕せり。

亦是祖父の悪報歟妻子にハ一毫も意中の機密を告ざりしが奴怨殺して
去るとのみいひてさすがに恨みん。ことしそ必死を究めたり沼藺ハ年来母
二十に足らぬことなれバ後悲に後家立させんハ便なきことぞ。事に假托離
別せしハかゝるまく渠がためならんとおもひし故につまもなくてなせしぞ悔しきかし。
かゝるべしと豫より悟りけれバ。返さずして大八さへに隷て遣りしハ渠が成長る
後まで外猶父に教育を托んためなりしハ仇ならずして過失といふものなりけれバ。
妻をも子をも自にかけて殺して竟に身を殺も輪田応報かくまでに。あはれ
けるかな歟犬田殿この悪縁を結びし故に沼藺が枉死ハ夫の餘殃山獄父の歎きも
和殿の憾をも想像て面目なし許しねと血に染し左手を抗ておろがむまでに
心の誠うち諦る傳稀なる孝順節義深痍も屈せぬ長物語に小文吾耳を
側て精を拊て感嘆の目をしばたゝきて涙を拂ひなかりける。山林和殿ハ親の

遺訓を守りて舊怨を釋んで為身を殺して仁をなすと心操こそ微妙けれ。
和殿の祖父が謬て犯せる罪を重くとも子孫二世の今のそのの汚名を
雪る孝順和漢ゆゑくあるべしや犬塚生の面影は和殿とよく相似たる
のみならず累世の主君の為ゆゑ身を殺してその死に代る忠臣はいと稀なるゆ
和殿とまたは通家なれば犬塚生は相識るまで且八幡の相撲より快くば
又えらび窮難今宵に逼まども外ゆゑも憂苦を告てその智恵を借んと
欲せども況身うつりあるまじく企及ぶべ死ゆあらねば、切なひとけさやうに今
もとよりまた資を設て父の縲紲を解くよりほかゆゑも同盟の士を救ふ便点
ゆもあらず夏意外に出て欺くに又泉下に人を殺して人を救ふ
素よりまこと願ひゆゑも犬塚生も如此なるべん。もとまたく今更に推辭てその
意に従はんとそ水よ懲て湯を辞も如く和殿をもくゆゑ狗死さらく吉ゆ益なと

いづくはせん又沼蔺と大八が枉死はいかく意外の殃泉傷の涙胸に盈て憾陽を
断とりくども。みな落命の致さとろ。うち歎くのみせんまどろの。さらぬと妹が
刀を犯して身を殺せども狗死なるまで。コレ家に相傳る破傷風の奇方
あり男女年なほ少壯なれば。鮮血各五合を取て合てその瘡に注ぎ洗へば
死を起して生に回るその瘡も亦愈なると。筒の塵を拂ひ飲て百度百中
恁ぞ譬へ養由基が百歩を隔て柳葉を射るが如し。便是コレ伯父
なり。那古七郎の傳方なりとそ。父に口授せられしを求めて得べき茶剤
なれば孫が施して。かくしてのみ犬塚生はその曉よりて破傷風に命
危しとの故に犬飼生を武藏の志婆浦に良薬ありとそ求んとて。暫
も今朝にも彼死へ赴きまども道遠くまどの還らぬ。縱和殿の便
点に任て今宵の危窮を脱てとも彼人の命終ぬ亦何の益あらんされば

沼蘭が枉死みよりまく闇まで男女の鮮血を獲こう不幸の中の幸欲天欲人欲欲ほる所只塞翁が馬が似こう。是はもと犬塚生の孝心義胆世が捷れを憐まるの神明佛陀の冥助がわくぐ亦何ぞや心安うと山林和殿と互と前世が相殺しこう讐敵今が舊怨氷解しく恩義が千引の石より重ろ功德をうぐ口碑が伝ゝく義烈の亀鑑がせざうんやとへいかく迄逞しく志氣ある壯夫をよりや彼王がうとも又つもどろうとの悪がうくとも互ぶ同盟が請加ぶが久後文が遇しうろんが親子三人ぶ共侶がうが命を損をう恨のこのうとみうと賢がしく且雄しく紀大家がうとも邪とうぶ。いよくよ強く頽折く。歎死ぶん痛しがよ嗚呼何とせんとびうまが義理がうぶむ愛哀苦浮世がうゝや五三の鯨音遠くぶまつぶのぐあがとをそえがけり。

里見八犬傳第四輯卷之三終

柳野川